

アーティストによる民俗芸能の媒介 ——コロナ禍における朽木古屋六斎念仏踊り

武藤大祐（群馬県立女子大学）

2020年春からの世界的なコロナ禍(COVID-19)により、民俗芸能は大きな打撃を被っている。地域で暮らす共同体の年中行事は、その安定した周期性によって技芸の世代間継承が保たれているため、稽古や行事の中止は芸能そのものの存続を脅かすことになる。したがってコロナ禍への対応はきわめて切実であり、オンラインによる代替的な継続の手段が様々に模索された。全国的な知名度のある祭りや盆踊りの場合、リアルタイムまたは録画で動画配信する事例も多く報告されている。

その一方、オンラインの仕組みを活用して、普段の担い手とは異なる部外者に地域の芸能を習ってもらうことで認知拡大や普及につなげようとする取り組みも散見される。代表例として、東京音楽大学の「オンライン芸能村」、国際交流基金アジアセンター主催「カラダでつなぐ、ASIA」、三陸国際芸術推進委員会・文化庁主催「三陸芸能短期留学(A.I.R.)／オンライン芸能体験」などがある。

滋賀県高島市朽木古屋の六斎念仏踊りでも、2020年秋からオンライン稽古が実施されている。朽木古屋の六斎念仏は長い歴史を持つ盆行事だが、人口減少と継承者の高齢化により2012年を最後に途絶えた後、市の教育委員会と有志団体「朽木の知恵と技発見プロジェクト」の呼びかけにより、パフォーマンスやダンスといった分野のアーティストたちが踊りを習い、参加することで2016年に「復活」したものである（この経緯については武藤大祐「限界集落の芸能と現代アーティストの参加——滋賀県・朽木古屋六斎念仏踊りの継承プロジェクト」、『群馬県立女子大学紀要』第40号、2019年、181-198頁を参照）。オンライン稽古も基本的にはこの枠組の中にあり、地域外からの参加者の増加に狙いがあるといえる。

この事例に特徴的なことは、地元の継承者（保

存会）の介在なしに、アーティストのみによって稽古が行われた点である。継承者たちが高齢で新しいテクノロジーを受け入れにくい、そして集落への部外者の訪問が難しいなどの事情から、メイン講師は2015年から「復活」プロジェクトの軸を担ってきた武田力が務め、他のダンサーたちも随時補助に加わる形を取ったのである。保存会会長をはじめ継承者たちも武田には信頼を寄せており、実質的に指導を委任された形といってよい。

このような実施形態は、継承者たちとアーティストたちとの長期に渡る関係構築抜きには難しい。そのことの帰結を、武田を含めた関係者や参加者への聞き取りをもとに考察したい。

第一に、通常は山深い朽木古屋で行われていた稽古に比べ、オンライン形式は参加障壁が低く、新たな参加者を多く迎えることができた。結果的に、武田の情報発信を通じて集まったアートやダンスの関係者が多く、民俗芸能がアート系の人脈に担われる傾向は強まった。他の民俗舞踊にもふれた経験のあるダンスの実演家たちは理解が速く、独自の記譜法の考案などスキルを発揮した。

他方、映像を通じて武田が自宅から教えるという形態は、芸能を土地の文脈から切り離すとともに、行事の全体から主に踊りの動作だけを切り出すことにもなり、六斎念仏は相当に抽象化された。また動作の真正性を武田個人が担保せざるを得なくなる点も軽視できない課題だろう。しかし指導に先立って現地での奉納の様子が記録映像として参加者に共有されたり、芸能についての説明が加えられたため、参加者の多くが、実際に現地を訪れて継承者たちと交流することで六斎念仏への理解はさらに深まるはずだ、との期待を語った。

民俗芸能のオンライン稽古は、テクノロジーの利便性と、文化的真正性に関わるリスク管理の高度なバランスが要求される。朽木古屋六斎念仏の場合、それは、継承者とアーティストとの信頼関係、そして伝統文化に対するアーティストたちの想像力に支えられているといえるだろう。